

<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」

Ver.2-010 号

### 終戦の月の同志社など

今年も終戦記念日がやってきました。

しかし、その迎え方がマンネリになっていないか？

と気になります。

そこで、終戦記念日の日に確認しておくべき情報がないか、探してみました。

#### 1. 終戦の月の同志社は、どんな状況だったのか？

その情報は、同志社女子大学の方が詳細に残っていました。ですから、

最初に探り上げ、同志社大学は後になりました。

しかし、両校も米軍との接近が終戦から僅か3. 4ヶ月後でした。

このことを不思議に思いました。何故なのか、教えてください。

#### 2. 原爆投下作戦に関する極秘電文

最近公表された電文です。米軍との戦略的な差を感じる内容です。

#### 3. 相良倫子さん自作の平和の詩「生きる」

6月23日の「慰霊の日」の沖縄全戦没者追悼式で、沖縄県浦添(うらそえ)市立

港川中学校3年相良倫子(さがらりんこ)さん(14)が「読んだこの詩が

今も反響を呼んでいます。

私は、このような感受性をもう持っていない。となると私は戦争のない世界づくりに何が出るのだろうか。とりあえずは、これを転送することにしよう。

なお、彼女は演台に向かうときは足が震えたそうです。そのせいか「きっとわかるはずなんだ。／戦争の無意味さを。本当の平和を」に続く「頭じゃなくて、その心で」という一筋を飛ばしてしまった。ここでは、修正し、挿入してあります。

追加:「両陛下最後の8月15日 -「平成最後のあの日」をどう締められるか-」  
前侍従長の川島裕氏と同志社 OB・ノンフィクション作家の保阪正康さんの対談  
なお、内容は『文藝春秋』2018年9号をご覧ください。

では、終戦記念日に確認しておきたい情報をお届けします。

## 1. 終戦の月の同志社

\* 最初は、同志社女子大学のHP・戦時下の学園<いくさのおわり>より要約

昭和20年の入学式は7月11日で、臨時の時間割で12日から授業を開始。上級生は出勤中であつたので、工場公休日の7月24日に計画の歓迎音楽会も空襲警報発令で中止。

8月15日正午の「終戦の詔書」放送の後、午後2時から臨時教授会。翌16日にも開催。その段階では「時局ニ応ジ冷静善処シ殊ニ言語態度ヲ慎ミ徹頭徹尾聖旨ヲ奉承以テ聖意ニ副ハンコトヲ期シ施設行事等ハ指示ヲ待ツ態勢ニ在ラン」(「職員会誌十」8月16日)。

17日には桂と太秦の動員解除。8月20日より8月末日まで全校夏季休暇と決定。つぎの教授会は8月20日に開催。その後も頻繁に教授会が重ねられ、戦時下体制の教育断絶後の、新しい教育理念が模索された。

9月1日授業が再開。しかし、京都府学務課は連合軍の京都進駐にそなえて休校勧告。9月4日の教授会は、翌5日の授業は予定どおりとし、終業後生徒に当分の間休校と決定。

文部省から卒業式は9月15日以降9月中に挙行すべきと示達。3年生は終戦後の授業は4日間のみで卒業式を迎えなければならなかった。その上、この学年は3年卒業とはいえ、実質の授業期間は農作業、防空演習、教練などに中断されながらの1年半そこそこにすぎなかった。そこで学校当局は9月中旬から卒業生のための「研究科」を設け、動員中の学力不足の補充。翌年46年3月まで開講。卒業生の約57.4パーセント(英文30名、家政67名)が在籍。研究科は3月28日終了。送別音楽会を催し、29日に修了式が挙行された。

府学務課視学は、通知するまで当分授業を休止する旨通達。

この間、9月25日に連合軍が京都に進駐。10月15日の始業式に加藤さだ教授が進駐軍に対する心がけについて訓話。その後も進駐軍との風紀問題に関して、たとえば夜間外出厳禁などの注意が繰り返さされている。

授業は再開されたが食料をはじめあらゆる物資が窮乏。試験答案用紙は、反故紙を用い、その答案用紙の氏名を墨で消して裏側を会議資料、簿冊などに再利用していた。教材用の印刷用紙は入手困難で、ついにそれを「生徒より提出させること」(「職員会誌十」11月21日)も決めなければならなかった。冬になってもストーヴの燃料が手に入らなかった。教室での外套、手袋の着用を認めている。ゲートルや靴下などの乏しい配給についても記録されている。食糧増産のための教職員、生徒の農園作業は継続しなければならなかった。

他方、12月8日のクリスマス・ページェントには進駐軍が参列した。前日の7日午後は練習のため授業を中止している。24日は大津進駐軍への「クリスマスサービスに生徒出席、帰りが遅くなるから寮舎へ宿泊させること」(「職員会誌十」12月22日)などとも記している。1年前には想像だにできないことだった。

\*ここからは同志社大学『同志社百年史』(通史編二)より

昭和20年10月、牧野総長は東上し、文部省と交渉。信仰を強制しないことを条件に、学校での宗教教育を認めさせて帰ってきた。11月1日から朝礼を廃止して礼拝に一本化した。たまたま、この礼拝は進駐軍のコーラスによる賛美礼拝であった。

11月29日は同志社創立70周年記念日。式典の最後はアメリカ軍のブラス・バンド演奏で式を閉じている。■

3-4ヶ月前までは、「鬼畜米英」「米鬼」と言っていたのに、この変化は何だったのだろうか。

.....

## 2. 原爆投下作戦に関する極秘電文

昨年、空襲の実態を調べる市民団体「空襲・戦災を記録する会全国連絡会議」(工藤洋三事務局長=山口県周南市=)が米国の公文書館のファイルからこの電文を発見した。

その電文は太平洋艦隊司令長官ニミッツが、前線で第38任務部隊を率いる第3艦隊司令官ハルゼーに送っていたもので、海軍の前線に原爆投下に関する情報が事前に伝わっていたのが確

認されるのは初めてとみられる。

米海軍：原爆投下前に電文「長崎、小倉、広島入らぬよう」

1945年8月9日の長崎への原爆投下を前に、米海軍への長崎出撃などを禁じた同軍の極秘電文3通を1～4日付の電文で、太平洋艦隊司令長官が日本近海で部隊を率いる第3艦隊司令官に送信していた。

それは米兵の被ばく防止と原爆投下を計画通りに進める狙いがあったとみられる。また、第3艦隊の攻撃目標が長崎から東北地方に変更され、東北空襲につながったことも判明した。

最初の電文は1日付で「4日に(原爆投下の)ターゲットの一つが京都から長崎に変わった」と伝達していた。

2日付の電文は「4日または5日、後に伝える時刻の4時間前から6時間後まで長崎、小倉、広島の半径50マイル(約80キロ)に入らぬよう」命じた。

4日付の電文には、原爆の投下は「第509混成群団」が実行するので、第38部隊の「九州と本州西部」への出撃を禁じた。

この命令を受け、第38部隊は、9と10両日に宮城・岩手・山形などの軍事施設を一斉に空爆したが、その背景に原爆投下があったことも明らかになった。

なお、工藤事務局長は電文を分析した内容を盛り込んだ「アメリカ海軍艦載機の日本空襲」を先月に自費出版した。

防衛大の等松(とうまつ)春夫教授(外交史)は「米政府は原爆投下作戦を極秘に進めていたが、投下の数日前には爆発の影響を想定し、日本近海で活動する海軍部隊の最高レベルには警告を出す必要が生じたことを示している」と指摘した。(毎日新聞)

*敗戦の原因は、兵器の格差の他、情報、戦略の差があったことは歴然とした。*

.....

### 3. 相良倫子さん自作の平和の詩「生きる」

2018年6月23日に行われた沖縄全戦没者追悼式で、沖縄の中学3年生の相良倫子さんが、自作の平和の詩「生きる」を朗読(実際は全文を暗唱)しました。

その詩は沖縄県平和祈念資料館が募った「平和の詩」971点の中から選ばれたもので、沖縄戦を生き抜いた曾祖母からその体験を聞いて創ったものです。

.....

音声はここで聞くことができます。 <https://www.youtube.com/watch?v=ZO6IROwP-Uw>

### 生きる

私は今、生きている。

マンツルの熱を伝える大地を踏みしめ、心地よい湿気を孕(はら)んだ風を全身に受け、  
草の匂いを鼻孔に感じ、遠くから聞こえてくる潮騒に耳を傾けて。

私は今、生きている。

私の生きるこの島は、何と美しい島だろう。

青く輝く海、岩に打ち寄せしぶきを上げて光る波、山羊(やぎ)の嘶(いなな)き、小川のせせらぎ、  
畑に続く小道、萌(も)え出(い)づる山の緑、優しい三線(さんしん)の響き、照りつける太陽の光。

私はなんと美しい島に、生まれ育ったのだろう。

ありったけの私の感覚器で、感受性で、島を感じる。心がじわりと熱くなる。

私はこの瞬間を、生きている。

この瞬間の素晴らしさが、この瞬間の愛(いと)おしさが、今と言う安らぎとなり

私の中に広がりゆく。

たまらなく込み上げるこの気持ちをどう表現しよう。

大切な今よ、かけがえのない今よ、私の生きる、この今よ。

七十三年前、私の愛する島が、死の島と化したあの日。

小鳥のさえずりは、恐怖の悲鳴と変わった。

優しく響く三線は、爆撃の轟(とどろき)に消えた。

青く広がる大空は、鉄の雨に見えなくなった。

草の匂いは死臭で濁り、光り輝いていた海の水面(みなも)は、戦艦で埋め尽くされた。

火炎放射器から吹き出す炎、幼子の泣き声、燃えつくされた民家、火薬の匂い。

着弾に揺れる大地。血に染まった海。

魑魅魍魎(ちみもうりょう)の如(ごと)く、姿を変えた人々。

阿鼻叫喚(あびきょうかん)の壮絶な戦の記憶。

みんな、生きていたのだ。

私と何も変わらない、懸命に生きる命だったのだ。

彼らの人生を、それぞれの未来を。疑うことなく、思い描いていたんだ。

家族がいて、仲間がいて、恋人がいた。仕事があった。生きがいがあった。

日々の小さな幸せを喜んだ。手と手合せて生きてきた、私と同じ、人間だった。

それなのに壊されて、奪われた。  
生きた時代が違う。ただ、それだけで。無辜(むこ)の命を。  
あたり前に生きていた、あの日々を。

摩文仁(まぶに)の丘。眼下に広がる穏やかな海。  
悲しくて、忘れることのできない、この島の全て。  
私は手を強く握り、誓う。奪われた命に想(おも)いを馳(は)せて、心から、誓う。

私が生きている限り、こんなにもたくさんの命を犠牲にした戦争を  
絶対に許さないことを。もう二度と過去を未来にしないこと。  
全ての人間が、国境を越え、人種を越え、宗教を越え、あらゆる利害を越えて、平和である世界を  
目指すこと。生きる事、命を大切にできることを、誰からも侵されない世界を創ること。  
平和を創造する努力を、厭(いと)わないことを。

あなたも、感じるだろう。この島の美しさを。  
あなたも、知っているだろう。この島の悲しみを。  
そして、あなたも、私と同じこの瞬間(とき)と一緒に生きているのだ。  
今と一緒に、生きているのだ。  
だから、きっとわかるはずなんだ。戦争の無意味さを。本当の平和を。  
頭じゃなくて、その心で。  
戦力という愚かな力を持つことで、得られる平和など、本当は無いことを。  
平和とは、あたり前に生きること。  
その命を精一杯輝かせて生きることだということを。

私は、今を生きている。みんなと一緒に。そして、これからも生きていく。  
一日一日を大切に。平和を想って。平和を祈って。  
なぜなら、未来は、この瞬間の延長線上にあるからだ。つまり、未来は、今なんだ。

大好きな、私の島。誇り高き、みんなの島。  
そして、この島に生きる、すべての命。私と共に今を生きる、私の友。私の家族。  
これからも、共に生きてゆこう。この青に囲まれた美しい故郷から。  
真の平和を発進しよう。一人一人が立ち上がって、みんなで未来を歩いていこう。  
摩文仁の丘の風に吹かれ、私の命が鳴っている。過去と現在、未来の共鳴。  
鎮魂歌よ届け。悲しみの過去に。命よ響け。生きゆく未来に。  
私は今を、生きていく。■

**私はこのような感受性をもう持っていない。  
となると私は、戦争のない世界づくりに何が出来るのだろうか。**